わこのみ
猫類通信

第３０号
平成十年
（１９９８）
１月１５日発行
（年４回発行）

空撓（そらだめ）考

東　明雅

前句と付句との距離が近いのを親句、遠く離れているのを疎句と呼び、従来、連句では物付・心付を親句、それに対して芭蕉の考案した余情付（匂付）を疎句と考えるのが普通である。

そして、「疎句に秀句多し」と既に十三世紀の藤原定家が喝破している通り、二つの句を付け合わせて、別の新しいものを作るためには、その前句と付句との間に広い空間か、或いは遠い距離があって、そこに読者の想像が自由に入り得る余地が必要なのである。これは日本画における余白の持つ意味と役目とに似たものであろう。それ故、物付・心付を主とした貞門・談林の俳諧にすぐれた作品が見当らず、余情付（匂付）を用いた蕉門の作品によって、はじめて今日の鑑賞に堪える名作が生まれたと言ってよいであろう。

現代連句は大体、芭蕉の作品をお手本として来たから、付け方も支考の七名八体説の手法を踏襲して来た。しかしながら、近頃はこの物付・心付・余情付（匂付）の手法に安住せず、もっと別の新しい手法を考え、これを実作に応用する人たちが現れるようになった。昭和四十五・六年ごろ、信大連句会の故高橋玄一郎氏、都心連句会の故野村牛耳氏そして、その弟子にあたる村野夏生氏（わだとしお）、山地春眠子氏らによる運動がそれであろう。高橋氏は連句一巻を非連続の連続と考え、打越にとらわれず、前句と異なるものを付けて行く方法を編み出し、これに矛盾付と言う名称を付けられた。

①ａ肉を挽く肉屋よ月のムンク展　　静生
　ｂ　独房にきく蟋蟀の雨　　玄一郎
②ａ砂をはく浅蜊の息の労れゐし　　芙紗
　ｂ　片足跳びをちんがらといふ　きよみ

①のｂはａに対し、②のｂはａに対してほとんど何の関係もなく並んでいるけれども、その並んでいる事だけで一種のおもしろさを感ずるのは事実であり、前句と付句との距離・間隔を最大に取れはこうなる他はないかも知れない。

このような手法は近代詩あたりから輸入されたものであろうが、蕉風俳諧の中にも、これに似た手法が全然無かったわけではない。七名八体の員外とされている空撓（そらだめ）がそれではないかと言われている。

空撓（そらだめ）とは無心に前句を吟じ返すうち、前句とは何の付け筋もなく、ふと思い浮かんだ姿をもって付ける方法である。

③ａ　障子に影の夕日ちらつく
　ｂ　聟殿はどれぞと老の目を拭ひ

支考は右の付合を空撓の証句としているが、これを敷衍された山地春眠子氏の説を紹介しよう（「二物衝撃の実践的メモ」「鷹九七・六月号所載）。尤も山地氏の説は俳句の手法に関連しての論で、従って挙げられた例も俳句であるが、その句が二句一章体である限りにおいては、理論は連句の付合と同じである。

「万有引力あり馬鈴薯にくぼみあり」という句は、次のような付合であろうが、

④ａ　万有引力あり
　ｂ　馬鈴薯にくぼみあり

私は③ａ・ｂの付味と④ａ・ｂとの付味にはやはり質的な相違があるように思われ、①ａ・ｂ、②ａ・ｂのあるいは④ａ・ｂの俳句の付合を空撓という名で呼ぶ事にはすぐさま賛同出来ないけれども、ただ、一句の中に、あるいは一枚の絵の中に、全く無関係な二つのものを並べると、その中に一種の文学が生まれ、美が生まれる。その事まで私は否定しようとするわけではない。

だから、私は歌仙一巻の中に、このように前句と付句の間が無限にひろがっている句も一・二句まじるのもおもしろいと思う。

新年明けまして
お目出度うございます

歳旦三つ物
猫蓑会主宰　東　明雅

柴又に馴染の店や初詣
春着の女の通ふ新道
花に月東踊も始まりて

平成十年一月元旦
（一九九八年）

桃径庵　式田　和子

賜はりしあらたまの文ちらし書
初刷り本にはさむ謹呈
尾道のロープウェイののどらかに

房連庵　内田　麻子

千里行く旅を夢みる虎の年
オリンピックの迫る初空
寒桜花さきがけて咲くならむ

緑華亭　坂本　孝子

猛虎静かに湖水を嘗める初日かな
吉書の筆に匂ふ唐墨
花衣エステティックの甲斐ありて

梅香庵　副島　久美子

水平線一気に昇る初日の出
四方拝む柏手の音
来世紀映す鏡を尋めゆかん

梓庵　中川　哲

脇起
元日の夕べ客なきまどゐかな　万太郎
いろはで揃へ賀状とりどり　キヌ
初曽我に対面せんと祖母気組む　哲

一穂庵　中島　啓世

弾き初めはリーベス フロイド選びけり
クライスラーと酌み交す屠蘇
紅梅の匂ふ道の辺華やぎて

凉月庵　中田　あかり

若者の笛を鳴らすや初神楽
年玉袋吠える寅の絵
はだら雪未来都市てふ夢をみて

三州めぎつねさままいる――北摂やまねこ

三州の野でおしゃべり連句にたわむれながら、そろそろ発句てふものに取り組んでみたいと考えているあなたにこの一文を草して参考に共します。

「一句の連句」のすすめ

片山　多迦夫

世界で最小の文芸、僅か十七文字の連句があることをご存知だろうか。所謂二章体の発句のことであって、蕉風俳諧の神髄というべきものである。私はこの二章体の発句を『一句の連句』と呼ぶことにしている。

二章体なる詩形式は遠く新古今集の西行、定家に胚胎し、初めて作品として結晶させたのは言うまでもなく松尾芭蕉その人である。門人の中で余に劣らぬ発句を物する者はあるけれど、連句こそ老翁の骨髄であると宣言したという話は、私に言わせると実は発句こそ老翁の骨髄なのだという自負の裏返しなのである。

二章体という言葉を意識して使い始めたのは大須賀乙字（一八八一―一九二〇）あたりからと思われる。彼は「二句一章の方法」と呼んで、一句中に断絶＝非連続を含み、その断絶あるが故に一層広いイメージを交響させることができると考えたらしい。その言や佳し。当時の俳句界は、今も同じことであるが、「陳腐山を為し、平凡海を為す」という有様だったから、その革新を狙った立派な提唱であったけれども、残念ながら実作を伴わず、単なる理論に終って挫折してしまった。そこで素晴らしい実作品の例をあげた方がわかり易いと思うので、以下にしるす。

山里は万歳おそし　梅の花　　芭蕉

「発句の事は行きて帰る心の味也。山里し万歳の遅しといふばかりの一重は、平句の位なり」（三冊子）とあって、あと一重の梅咲き匂うのどかな情景を付けることによって一句として完成したというわけである。断絶を越えて、「行きて帰る」ことができるのが二章体の発句である。

草臥て宿かる比や　藤の花　　芭蕉

「此句、はじめは、ほととぎす宿かる比や、と有。後、直る也」（三冊子）

此秋は何で年よる　雲に鳥　　芭蕉

「此句、朝より心にこめて下の五文字に寸々の腸（はらわた）をさかれし也」（笈日記）とある。今でもちっとも古びない不易の一句と言うべきであろう。

下京や　雪つむ上のよるの雨　凡兆

「此句、はじめ冠無し。先師はじめいろいろと置侍りて、此冠に極め給ふ。凡兆あトこたへていまだ落ちつかず。（そこで）先師曰、兆、汝手柄に此冠を置くべし。もし、まさる物あらば我二度（ふたたび）俳諧をいふべからずト也」（去来抄）。

いつも、この凡兆あトこたへて未だ落ちつかずという件りで笑ってしまうのだけれど、正に去来迫真の文章である。芭蕉翁のこの絶対の自信に迫り得る俳諧作家がひとりでもあるだろうか――。

現代に例をとれば、

降る雪や　明治は遠くなりにけり　草田男

この句、初案の上五が「雪は降り」であったという。これでは一章体の平凡な俳句である。既に「けり」の切字があるのに敢然と「や」の衝撃の切字を加えることによって、降りしきる雪世界と、自己の包懐する激情とを、より高い次元に統一することができたのだ。先々師、根津芦丈翁が、その著「苧日記」でつとに指摘しているように、

「二章体の俳句は、殆ど小さい連句であると思えばよろしい」と。これは全く至言であって、この一語を見てから連句文芸やるべしと覚悟したころが今やなつかしい憶い出である。

この一句の連句＝二章体の発句に挑戦されることをあなたにすすめたい。その努力がやがて歌仙や百韻の付句に生かされること、夢々、疑うことなかれ。呵々。

〈一九九七・十一・二〇　於大阪回生病院ロビー記〉

思い出

近藤 守男

昭和二十年五月、秋田県能代市淳城（ていじょう）第二国民学校五年生の私は、同級生のKに連れられて蕨採りに出かけた。東京の大塚で戦災に遭い、この四月に疎開してきた私にとって、初めての経験であった。

川幅三百米余りの米代川の木橋が流失していたので、川向こうへ行くには五能線の鉄橋を渡らねばならなかった。線路の間に三十糎幅の板二枚が渡されていて、この上を列車通過の合間を縫って両岸から往来するのである。列車がやって来るのと落下の恐怖でいっぱいになりながらKの後に従った。途中、向こう岸の航空基地の将校がその細いところを自転車を漕いでやって来た。枕木と線路にしがみついてよけている私たちの傍らを、彼はカーキ色のマントを翻しながら遠ざかっていった。

渡りきると早速蕨採りが始まった。屈んだ姿勢に疲れると、立ち上がって雲雀を眺めたりした。Kと競うように採っている中、いつの間にか私たちは飛行機の側に来ていた。飛行機には木の枝やネットを被せてあった。誰にも注意されなかったのが今思うと不思議だ。

負い籠に沢山の収穫を得て再び鉄橋を渡り、家に帰りつく頃はとっぷりと日がくれていた。母が心配して待っていたのを覚えている。

五六年生は勤労奉仕にもかり出された。特につらかったのは、航空燃料用の松根油を得るために、能代浜で伐採された松の根を掘り出す作業であった。根の周りを池のように掘り込み、細根を鋸で切り、一塊の根を取り出すのである。これには丈夫な地元の同級生も音をあげていた。

そんなことをしているうちに戦争も終わり、二学期には復員した若い先生が担任になり、国史、国語、地理などの不適切な箇所に墨塗りをさせられた。

北国の秋は短く、時雨が木々の葉を染め、葉を落とした。その頃移った新しい家の軒下に、冬に備えて薪用の側板を馬車で運び込み、積み上げた。家の窓全部に外から板を打ちつけ、欄間の硝子戸には内側からも目貼りをした。室内は朝から電灯を必要とした。

初冬の空はほとんどが曇天で、霙か雪が繰り返し降った。木炭バスは冬期の運休に入り、雪道を往来するのは馬橇だけだった。

雪国の本格的な寒さに抵抗力のなかった私は寒さが身に沁みた。薪不足のため、学校のストーブは午後には火が落とされた。私は通学時の他は家に閉じこもったままだったので、顔は青白く、担任の先生の指示で医者の診察を受けさせられたこともあった。

けれど、長い冬も彼岸の頃から根雪が溶け始め、黒い土が雪間からのぞくようになると、いいようのない喜びが身内に湧いた。

◆「寝正月」もお節料理もだんだんつまらなくなってくる時、よい本が傍らにあるならこれは救いである。この度たまたま寺崎方堂と吉岡梅游の『方梅千句』にふれる機会があり、久しぶりに連句を読む愉しみを味わった。せいぜい数十年前の世の中の暮しや嗜好やを扱っていると思われるのに、分からない言葉が多いのには慌てた。年輩の方々に伺うとあっけなく解決したりして、自分だけが特別に無知なのかとぐったりしてしまうが、分からない言葉はあっても、どんどん引っ張られる。

歌澤の節も自烈たきただれ恋　堂
松をくぐって破る傘　游

百夜とは愚十夜も通へまじ　游
見るともなしに蜘蛛のおこなひ　堂

那智黒のぬれ色さては握り汗　堂
二煎昆布の味も香もなし　游

はからずも山塞の宴覗きたり　游
巌の尖りに叫ぶ凩　堂

星糞の目方はざっと五百貫　堂
脂の流るる松の折れ口　游

ざっと抜いたが、前句と付句の醸し出す世界の面白さにはまことに胸のすくものがある。ちなみに吉岡梅游は、今号寄稿いただいた片山多迦夫氏のお師匠です。（佛渕健悟）

第十八回俳諧芭蕉忌正式俳諧

次第	役割	
一 席改め		
二 席入り	宗匠	坂本 孝子
三 配硯	脇宗匠	市野沢弘子
四 献花	執筆	大窪 瑞枝
五 執筆呼び出し	知司	近藤 守男
六 文台捌き	副知司	浅賀 淑代
七 俳諧興行	座配	吉村ゑみこ
八 花前	座見	小野 シズ
九 献香	花司	八角 澄子
十 花の句披露	香元	倉本 路子
十一 端作り	配硯	椿 紀子
十二 吟声	〃	加藤 道子
十三 文台返し	〃	松本 碧
十四 作品奉納	老長	中田あかり
十五 納硯		
十六 挨拶		
十七 退席		

平成九年十月十五日
於 江東区芭蕉記念館

芭蕉忌俳諧興行

脇起二十韻「初しぐれ」

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　翁
　柞紅葉の残る岨径　明雅
井戸茶碗濃茶とろりと廻りきて　ゑみこ
　兄弟はみな左利きらし　淑代
名月を港へ急ぐ漁船団　シズ
　風吹く前に済ます収穫　守男
ジーンズの脚が爽やかひとめ惚れ　道子
　不倫願望抱く妻たち　紀子
選り抜きの葡萄酒ばかり地下室に　弘子
　薔薇散るときヘンデルの曲　あかり
風刺劇後味も良く夏の月　豊美
　躁と鬱とは金の有る無し　淳子
薄情と知りつつ添ふも浮世にて　碧
　さはさりながら年子続々　澄子
サバンナに四輪駆動砂煙　路子
　焚火の端で書きしレポート　健悟
大勲位院政の夢捨て切れず　志乃
　引き行く鶴の翼眩しき　慎二
滝桜宴に花の惜しみなく　孝子
　甘さほんのり青饅の味噌　執筆

平成九年十月十五日
於 江東区芭蕉記念館

二十韻「翁の忌」　東 明雅 捌

芭蕉庵富士は見えねど翁の忌　明雅
　四温の川にもやふ曳舟　瑞枝
シンバルを叩きゆく子の胸はりて　ゑみこ
　台所では即席の麺　慎二
月光に照らされてゐる煤け札　志乃
　絲瓜の水を取りためるなり　治子
助手席の娘が初猟の獲物とか　枝
　脚にかけたる保険数億　二
パソコンで遠隔診療時の間に　治
　サマーハウスの週刊誌読む　ゑ
白地着て地酒いよいよまはりけり　乃
　矢倉囲ひで勝ちし一局　枝
番号で呼ばるる元の大統領　ゑ
　みそぎ済んだと知らぬふりして　二
岡惚れはキムタクに似たいい男　治
　ロングヘヤーをかき上げるキス　乃
故郷は月に生まるる雪蛍　枝
　茹でし卵を立ててみる春　二
画家の目はいつも旅人花の雲　治
　夢のごとくにかかる初虹　ゑ

平成九年十月十五日　首尾
於 江東区芭蕉記念館
連衆　大窪瑞枝　吉村ゑみこ　鈴木慎二
　　宮内志乃　加藤治子

二十韻「桃青忌」　蒲原志げ子　捌

下町の面影何処桃青忌　志げ子
なめすすき汁吸へばにっこり　哲
細巻の煙草一服甘露にて　和子
バイクに頼む書類急送　碧
甲斐駒に弓張月のしらじらと　ふみ
踊浴衣に深々と笠　凡
タウン誌の秋号に載り玉の輿　和
遺産を残す猫の菊千代　み
お相伴振舞ひ酒に連れ立ちて　凡
通天閣は愉快痛快　和
故郷は心の奥の蝉時雨　げ
向日葵まぶし照れる母上　哲
非婚です仕事と恋の二本建　碧
指のからくり間違へちゃだめ！　哲
どんでんの返れば姫の足袋に月　碧
カンツォーネはゴンドラの中　み
病体と老体俺は歩行体　和
春泥たっぷり有機野菜に　碧
夢とろろ花爛漫に酔ひ痴れて　哲
自作絵凧のうなりつつ舞ふ　凡

平成九年十月十五日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　中川哲　式田和子　松本碧
中村ふみ　中川凡

二十韻「小春凪」　副島久美子　捌

大川に鴎の飛ぶや小春凪　久美子
汐の香ほのとさざんかの庭　水壺
轆轤止め壷の厚みを確かめて　玲
ペットボトルのお茶をいっ気に　弘子
月のぞくペントハウスの五角窓　淑代
残る蚊がさす援助交際　芙紗
胡桃割る舌っ足らずを膝に乗せ　弘
聖譚曲の譜を納む箱　代
ダイアナさんためらはず行く地雷原　玲
レッサーパンダ身籠ると聞く　代
もしもしがもちもちとなる糸電話　壺
黒蜜糖のからむ葛切　玲
生き方はつまり死に方月涼し　弘
あんたは来ないいくら待っても　紗
嬉しさはまたこいさんに叱られて　壺
京の小路の雨に濡れつつ　代
暖冬を案じてをりぬＩＯＣ　紗
蛙合戦始まってゐる　代
扁額に「無功徳」とある花明り　紗
刹那の夢を惜しむ踏青　玲

平成九年十月十五日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　今宮水壺　日高玲　市野沢弘子
浅賀淑代　根津芙紗

二十韻「桃青忌」　豊田好敏　捌

桃青忌執筆のひとり舞台かな　好敏
襖を透す凛とせし声　世止彌
豆腐切る谷のせせらぎ引き込みて　孝子
煙の彼方過ぐるＳＬ　みづゑ
ホップ摘むバイト賑はふ夕月に　麻子
流星仰ぎ交はす口づけ　シズ
他人の恋盗むも愉し諸霊祭　孝
円と株とがまたも大安　彌
何時見てもダリの時計はいびつにて　ゑ
短尾の猫を踏みさうになる　麻
眉上げし若き鵜匠にかがり燃え　ズ
くもり硝子に冷酒注ぐ袖　孝
これはまあ抱かれ上手の抱き心地　ゑ
ヴィオロン濡るる坂道の家　孝
梟の鳴く梢はるか月まろく　彌
単身赴任長き札幌　麻
紙ふくみ太刀盛の線鮮やかに　ズ
浅蜊たっぷり炊き込みの飯　敏
満願の今日しも花の道成寺　孝
夢の中でも揺らすふらここ　ズ

＊太刀盛＝太刀の刃に漆を塗って
碁盤の線を引く技術

平成九年十月十五日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　佐藤世止彌　坂本孝子　山口みづゑ
内田麻子　小野シズ

二十韻「旅箪笥」　原田千町　捌

芭蕉忌や尼が点前の旅箪笥*　千町
紅葉幾ひら散らす壷庭　英二
タピストリー幾何学模様織り上げて　文子
なかなか宿題終へぬ弟　淳子
高架線駅に満月昇るらん　かりん
金毘羅祭りちょい役で出る　紀子
小鳥くるポストに待つはラブレター　淳
目隠しされて君が香に酔ふ　文
地下壕に通じる錠の錆びはてて　英
復讐迫る父の亡霊　同
ベドウィン族白き砂漠に馬を駆り　文
音なき風に箒草揺れ　紀
三日の月棋譜かたはらに心太　淳
転がり込んだ大臣の椅子　英
極道の妻はしゃなりと牢見舞　か
白粉彫の肌に浮く夜叉　紀
せせらぎに夕闇の色深みつつ　淳
卒寿の師へと春暖炉焚き　千
呑み干さむ銘酒可盃花の宴　文
夢より生れて翔んでゆく蝶　か

＊旅箪笥＝茶の湯の棚物の一つ。旅行用に茶道具一式が入るよう工夫されている。

平成九年十月十五日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　日高英二　橘文子　上月淳子
登坂かりん　椿紀子

二十韻「朱欒」　佛渕健悟　捌

ころがして諸礼停止の朱欒かな　健悟
残る虫にも小さき日溜り　千寿子
切り絵する母の鋏のひびくらん　道子
ライブ案内ファックスで受け　冬乃
稲雀ニューファッションにたじろぎて英子　乃
新妻振りを見せる月の座　千
火祭の夜は弄ばれさうな　道
高速道は西に東に　悟
子の顔を拝めぬ麻薬Gメンは　英
ウルフてふ名の相棒の犬　道
古里の吉四六噺夕涼み　英
梁にかかりしものがちらちら　道
世に恐ろし女子高生と債権屋　千
好きにしてよと投げる手袋　乃
月のイヴドン・ジョバンニをきどってた英　乃
市場の鐘の響く暁　悟
黙々と競歩してゐる双子なり　道
穴出る墓に挨拶をして　同
般若湯ふるまはれたる花の寺　乃
謡を真似る声ののどかに

平成九年十月十五日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　紺野千寿子　加藤道子　百武冬乃
佐古英子

二十韻「翁の日」　村田冨美　捌

水底の石静かなり翁の日　冨美
そこはかとなく舞へる綿虫　郁子
エチュードの仕上げ乱れず鍵盤に　蓉子
熱き珈琲ニツケ棒添へ　あかり
山の端に漸う月の昇り来る　政志
爪くれなゐで染めし親指　正楓
縁遠き娘だらだら祭好き　郁志
ラブラドールに曳かれゆく坂　楓
宰相の掛け声倒れ行革は　蓉
多忙な季節閻魔大王　蓉
帰省子の何でも詰めし旅鞄　り
鵜篝消して細き月影　蓉
神経痛辛口酒で治したる　郁
ムーランルージュ老いらくの恋　同
ダブルでも狭いとこぼす元気者　り
思惑買ひですってんてんに　蓉
三分間じっと我慢の即席麺　同
黄砂降る村灯す電球　志
墨堤の花にいくさの遥かなり　楓
東踊りの幕開けを待つ　り

平成九年十月十五日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　東郁子　五味蓉子　中田あかり
峯田政志　成瀬正楓

二十韻「空芳しや」　八代　嫋　捌

さざん花の空芳しや翁堂　嫋
まらうど揃ひ口切の茶事　清子
旅プラン地球儀囲み弾むらん　暁巳
ブランドバッグ集めるが趣味　利子
みちのくの味たっぷりときりたんぽ　庸子
個別授業を望む夜学子　澄子
まんまるな月に彼女の顔重ね　利
シャワーいつまで焦らす莫連　巳
キリストを抱き嘆きのマリア像　清
おっかなびっくり渡る桟橋　庸
大甘の経済予測胸を張り　巳
血糖血圧正常を告ぐ　清
金魚売天秤棒で来たさうな　澄
豆腐肴に泡盛の月　清
惚れた人婆付き瘤付きやまとんちゅう　巳
不倫離婚の果ての復縁　清
孔雀鳥七色の羽展げゐて　庸
樵の唄ののどかなる沢　利
「智恵子抄」繙き偲ぶ花の下　庸
春山スキー夢のシュプール　澄

平成九年十月十五日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　下鉢清子　島村暁巳　梅田利子
久保田庸子　八角澄子

二十韻「清洲橋」　山崎一恵　捌

時雨忌やゆっくり渡る清洲橋　一恵
紅葉散りこむさざ波の岸　達子
カルチャーのコーラス講座ひらかれて路子
いつも集るコーヒーの店　志世子
月の射す窓辺で読める唐詩選　守男
北夷来寇秋あはれなり　豊美
すずろ寒恋の坩堝の歌舞伎町　路
家出娘の乗る玉の輿　同
パパラッチ「英国のバラ」散らしたる　豊
夢観音にお百度をふむ　志
なつかしき切り飴綿あめ氷すい　達
蝙蝠の飛ぶ月の軒下　豊
サンドマン来るぞ子供ら早く寝よ　達
口説上手なゴーストライター　守
押し強く色気たっぷり振りまいて　路
探しあてたる鮫皮の靴　守
森英恵プレタポルテに君臨す　志
テニスボールのはずむ下萌　達
もてなしに酔うて候花霞　同
武者絵字凧を眺めゐる部屋　守
＊サンドマン＝西洋で寝ない子供を
脅かす妖怪

平成九年十月十五日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　篠原達子　倉本路子　秋山志世子
近藤守男　高橋豊美

電通連句会

二十韻「溢蚊」　青木秀樹　捌

溢蚊や老眼鏡の度が合はず　秀樹
雲の切れ間を出づる十六夜　郁子
今様の衣装を案山子きせられて　好敏
缶入り紅茶キオスクで買ふ　碧
終着のイスタンブール人の波　敏
瞳と瞳で交はす愛の微笑　郁
年下で子連れで婆も連れてくる　碧
パチプロ稼業新築の家　敏
下鴨の糺の森に狸棲む　碧
鮟鱇の肝まづは乾杯　郁
還暦にホームページを開設す　敏
内閣改造物議騒然　郁
だめはだめきっぱりと言ふ大年増　樹
妻の腰もみ入る菖蒲湯　敏
月涼し妖怪都市は目覚めをり　碧
百済観音仰ぐパリジャン　郁
シェフになるまでは帰れぬ鍋洗ひ　敏
自慢の凧を競ふ原っぱ　郁
山辺までSLが行く花盛り　碧
探せば声の洩るる巣箱　敏

平成九年九月十八日　首尾
於　電通本館会議室

連衆　東郁子　豊田好敏　松本碧

「田一枚・・・」の謎（1）

日高 英二

俳諧はウイットの詩である。無論ウィットばかりではないが、ウィットは俳諧の滑稽性・挨拶性にも適う大事な要素であると思う。何故ウィットなのかという議論はここでは展開できないが、その心理学的効用の一つは、「可笑しみ」によって人の心を浮き立たせることにある。しかもそれが連句であれば、ウィットの応酬、掛合いになるわけだから、一座は笑いに活気づき、詩的晴朗に包まれることになる。

ウィットの要諦は先ず短いことだが、この条件は連句の形式によって初めから満たされている。次にその言辞の内容によって人の意表を突き、笑いを醸すことであるが、代々の俳諧師はまさにそのような「気の利いた」句作りに腐心してきたのである。その機制は初めは句の表面に露出しており、「可笑しみ」の種は容易に理解できたが、その巧妙さを競うためもあって、次第に句の裏側に潜り込み、中に溶け込み、やたらに「謎」めいた様相を呈してきた。「詩は謎である」という西洋詩人の言葉もあるが、この謎性は敬愛する芭蕉の句の中にもいっぱいあって、私のごとき凡庸な頭をしばしば混乱に陥れる。例えば有名な「奥の細道」の次の一節、

また清水ながるるの柳は芦野の里にありて田の畔に残る。此所の郡守戸部某の、此の柳見せばやなど折々にのたまひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日この柳の陰にこそ立ち寄り侍りつれ、

田一枚植て立去る柳かな

この句は一体どう解釈すればいいのだろうか。この芦野の里の「清水ながるるの柳」というのは、能楽「遊行柳」のもとになったもので、その中の詞章によれば、昔西行法師が奥羽行脚の途中ここに立ち寄り、

道のべに清水流るる柳陰
しばしとてこそ立ち止まりつれ

と詠んだとされる伝説の朽木である。能因・西行の足跡を慕って旅に出た芭蕉にとっては是非とも一見の上、一句ものせねばならぬ俳枕であったにちがいない。

最初「奥の細道」の中でこの句に出会った時、私には意味がよく解らなかった。今でも理解したとは言い難い。しかしながらＡＣＣの連句教室で二年もしごかれた結果、解の糸口が少し見えてきたように思う。いささか調べてみた結果、この句の解には大方の評者がてこずっておられ、大別すると次の四通りの解があることが分かった。

① 田を植えて立ち去るのは早乙女たちで、芭蕉はそれを眺めている。
② 一枚の田植が終るまで眺め、柳の下から立ち去るのは芭蕉自身である。
③ 田を一枚芭蕉自身が植えて立ち去る。
④ 田を一枚植えて立ち去るのは柳である。

無論それぞれの解にはそれぞれの理由付けがあって、それぞれに面白い。面白いがしかし、私にはなおどの解釈も釈然としないものが残る。露伴先生は②の解釈を採っておられるが、「さほどよい句ではない」と逃げ口上めいた台詞で評を結んでおられる。ほんとにこれは「さほどよい句ではない」のだろうか、あの大天才が数年も掛けて推敲に推敲を重ねた紀行文中の一句であるというのに・・・。

英語連句の試み 花鳥風月（4）

浅賀 淑代

ア・ハッピー・ニュー・イヤー！

新しい年を迎え、皆様はどんな決意をなさいましたか？

One resolution
this New Year's Day - not to make
one resolution
（米国・Robert Major／国際歳時記より）

＜新年の決意ぞ決意なぞすまい＞

うなづいている方もおありでしょうか・・。

言霊に心ゆだねむ年はじめ　文子

橘文子さんの本年の決意表明です。英語句も書いて頂きました。

New year's resolution
to fall deeply into
poem spirit　(ft)

「言霊」はむつかしい、とおっしゃっていましたが、工夫された表現ですね。頭に定冠詞を入れると一段、格がはっきりすると思います。resolutionはすこし間違えると標語のようになりがちな季題ですから、苦労します。が、それを逆手にとって、平たく言ってみるのもひとつの手かもしれません。試訳です。

resolution!
I'll give myself to
the poetry spirit, this year

「季語」の豊かな国に住む私たちは幸せです。英語の場合、取り分け「新年」らしい趣を持つことばになかなか出会えません。しかし、New Year's resolution（または単にresolution）などの語は「季語」として光っているように思えます。将来、国際連句実作や歳時記づくりの場で「新年」をどう扱うか議論も出てくるでしょうが、その扱いはともかく、新年（あるいはクリスマスなどを含むホリデー・シーズン）の語を蒐集・吟味することは、楽しい作業ではないでしょうか。取り組みに期待したいですね。

ところで話は変わりますが、今年、私たちも英語連句募吟に挑戦してみませんか？

米国俳句協会主催のレンク・コンペティション（150ドル）が年一回開かれています。大賞には賞金が年一回開かれています。大賞には賞金（150ドル）も付くそうです。締め切りは十月一日。参加料十五ドル。形式は歌仙、二十韻、十二調のいずれでも。独吟不可とのことです。詳細はどうぞ浅賀まで。

my love verses
also cross the Ocean
first dawn　(ta)

（初茜わが恋の句も海を越ゆ　淑代）

＊ 連句と酒 ＊

「下戸の嘆き」

蒲原 志げ子

『一巡致しました所で、一献と参りましょう』の声が掛かると、たちまち座が和む。酒気の入らぬ座では茶菓に恨めし気な上戸の顔。

『やれやれ今日は静かに句作りが出来る』と嬉しげな下戸の顔。

酒の功罪は計り知れぬものがある。下戸の言い分を聞いて、成る程、ご尤も、と頷き、上戸に差されれば有難く頂戴とは我が節操の無さよ。

『下戸と言われた人には松尾芭蕉、西鶴、京伝、馬琴、二世蜀山・・・』何と何と、こうもすらすら言える口元に驚きつつも、よくもまあ素面であの様な恋や戯言を・・・と妙な感心。

しかし、古い文明は必ずうるわしい酒を持ち、すぐれた文化のみが、人間の感覚を洗練し、美化し、豊富にすると言うではないか、酔のまどいのみを取り立てて言うなかれ、外は雪、貴方には汁粉、我らは熱燗。さてさて、千万無量にして無上の美徳をもう一献。

◇ 猫簑会案内

連句会

○奉納正式俳諧

場所　亀戸天神社

江東区亀戸三ー六ー一

日時　四月二五日　一時より

正式俳諧のあと二十韻興行

○「猫蓑作品集 Ⅷ」は沢山連句作品を頂きまして、編集作業も進んでおります。四月末頃には出来上がる予定です。

工藤 芝蘭子

杉内 徒司

根津芦丈翁追善の前書のある「水仙の巻」が『芝蘭子句集』（昭和四十七年六月刊）に載っている。

これは『芋日記』（芦丈三回忌追善集四十五年九月刊）に寄せられた歌仙だが、式目に難ありという東京側編集者の意見から、芝蘭子との間に何回もやりとりがあり、結局相互の納得成らず、掲載に至らなかったのである。

落柿舎十一世芝蘭子は本名工藤九郎。大分県出身。大正から昭和にかけて大阪堂島の米穀取引業者として活躍、戦争によって取引所閉鎖後は東京で事業を営む。

芝蘭子は戦後六十を半ば過ぎてから落柿舎へ入庵したが、彼と落柿舎との関係は十世永井瓢齋とごく親しかったからだ。

落柿舎は長い浮沈の歴史を繰り返して、明治大正の頃は、在るか無きかの状態だったが、瓢齋十世や芝蘭子等の尽力で、元の持主から買い取り、昭和十二年三月登記を終えて、財団法人落柿舎が永続保存をはかっている。

戦後の義仲寺と無名庵もご多分に漏れず建ち腐れ同然だった。その再建に地元有志が立ち上り、俳諧を嗜む谷口久次郎知事も熱心に協力したが、古寺の復興には莫大な資金を要するから仲々進捗しなかった。

芝蘭子庵主が義仲寺再建に乗り出したのは、寺崎方堂無名庵十八世が昭和三十八年十二月二十四日になくなられた翌三十九年からである。

昭和四十年三月、旧知の保田與重郎を説き、二人は上京して保田與重郎著『現代畸人傳』出版記念会が上野精養軒で催された翌日、揃って日本橋室町の三浦義一翁の事務所を訪問した。

ふたりはやわらかい表現ながら、翁に義仲寺再興を懇請した。

二人の要請を一諾された三浦翁はただちに再興の手配をされ、その年の芭蕉の忌日十月十二日落慶供養が行われた。

同時に落柿舎十一世工藤芝蘭子が無名庵十九世を兼ねることになった。

芝蘭子は四十六年三月十日没、八十一歳。

芝蘭子がなくなって二十余年になるが、その薫陶をうけ二人の学者が現在の連句界に活躍している。福田眞空国士舘大学は、芝蘭子の遺志をついで昭和四十六年八月十二日、奥嵯峨落合に芭蕉の「青松葉」の句碑を建立、今年は二十七回目の落合祭りを八月碑前において行うという。

また学生時代、芝蘭子に侍して落柿舎住まいをしたという近藤蕉肝成蹊大学教授は、夫人ともども連句実作にも打ち込み、国際連句協会長として海外への連句普及に活動を続けている。

質問コーナー

東　明雅

【Q】　連句の席にのぞむ時はどのような準備をすればよいのか、心構えなどについてお教えください。

【A】　連句の席と言っても様々で、一概に言えませんが、たとえば自分が捌きをしなければならない席とか、あるいは珍客として招待された席などの場合は、必ずその場・その時に叶った発句を用意すべきでしょう。有名な話ですが、膳所の正秀亭に招かれた去来は、発句の用意がなかった為に、一座に迷惑をかけ、その夜芭蕉から一晩中、叱責されたと言います。「お前は今夜初めて正秀亭に出席した。珍客であるから、発句は自分が出すものと前もって覚悟しておくべきである。その上、発句をと乞われたら、句のよしあしを考えずに早くに出さねばならぬのに、お前はそれもできなかった。一夜の時刻はいくらもないのだ。お前が発句に時間を費やしたら、今宵の会はつまらなくなるだろう。まことに風雅の心のない仕業である」というのが理由でしたが、まことにご尤もな説で反論の余地はありません。さらに捌きや珍客でなくても、一座の仕儀では、何時、自分が発句を出さねばならぬ羽目にならぬとも限りません。そんな時おたおたしないように、一応、最低、一句か二句はその場・その時に応じた発句を考えておくべきでしょう。

さらに発句のみでなく、平句も準備しておくべきだという論もあります。いわゆる「孕句」あるいは「手帳」といわれる方法であります。「会席に出ようと思ふに、孕句を沢山にこしらへ置いてよくそらに覚えてをるぢや。前日などの急拵は忘るるものゆへ、常々目に見、耳に聞く事、是はよい俳諧と思ふ事を長い句と短い句にゆるりと案じて拵ておくぢや」と「俳諧仕様帳」という本の中に書いてあります。

元々、連句はその場に臨んで即興で付けるというのが原則ですから、それを予め、五・七・五、七・七の形までちゃんと作っておいて、どんな前句にでも合うものがあれば付けていくというのはやはり邪道でしょうし、芭蕉も手帳らしい句は嫌ったと、はっきり「去来抄」に書かれております。

但し、その芭蕉も、たとえば「浮世の果は皆小町なり」という句をかねがね胸の中で暖めて、「さまざまに品かはりたる恋をして」という凡兆の前句が出るまでじっと待っていたと言われております。

このように連句の席に臨む準備は、平素の修行・勉強の中にあり、その中で連句の材料となるもの選び出し記憶しておく事で、実際の句作りは一座の席でされたらよいと思います。

◇　猫蓑発展基金ご協力有難うございます。

五千円　大野鵠士
一万円　田中一火女
二千四百円　小池正博

（敬称略）

◇　基金の口座　富士銀行新宿西口支店
普通3376045　猫蓑基金

……§……§……

あとがき

○　新年から思いがけない大雪。雪体験の少ない都会の翌日は、凍った路面をペンギンウォークで急ぐ人々の悲喜劇が・・。

転んで立ち上がる人の表情に幾通りかあり、憤懣やるかたない顔、何故かニヤッとする人、だれか見ていなかったかと、そちらが気になる人・・。かくいう編集者も見事にスッテンとやった。頑張らず潔く転びなさいというテレビのアドバイスはありましたが、やはり一本取られた感じがしますね。

季刊　「ねこみの通信」第三十号
発行者　猫蓑連句会
編集人　〒一九五　町田市金井6-7-6　佛渕健悟
印刷所　アトリエ・Ｎｅｋｏ